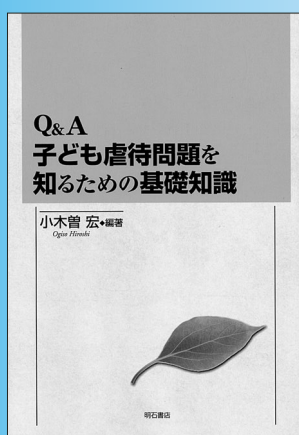


子ども虐待に対応する人の さまざまな疑問に答える一冊

【評者】山田和子 国立保健医療科学院公衆衛生看護部

Q&A 子ども虐待問題を 知るための基礎知識

小木曾宏(編著)



定価 2,100 円(本体 2,000 円+税 5%)
B6判, 257 頁
明石書店
TEL.03-5818-1171

2000 年は、「児童虐待防止等に関する法律」が施行されるとともに、地域保健においても、「健やか親子 21」検討会報告で初めて子ども虐待対策が母子保健の主要業務の 1 つと明確に位置づけられた年であった。それから 3 年以上たち、地域保健での取り組みも徐々に充実してきているが、子ども虐待対策を行うにあたって、保健師の不安や悩みを各地で聞くことが多い。

地域保健へは、予防・早期発見・在宅での支援など幅広い役割が求められているが、支援方法については、確立した方法があるわけではなく、各地域で試行錯誤しながら支援を行っているのが現状ではないだろうか。それだけに保健師の不安や悩みは大きいと思われる。さらに、そういった不安や悩みは初めて虐待に取り組む保健師も、あるいは経験を積み重ねてきた保健師も、内容は異なるがさまざまな形で抱えている。そのようなときに、本書を読むと実践のヒントが得られるのではないかな。

本書の特徴の 1 つは、現場の実務者が中心になって執筆している点にある。編著者は児童相談所、児童自立支援施設で長年児童福祉に従事し、その後大学に移り、現在、大学で教えるかたわら「千葉子どもの虐待防止研究会」の事務局長を務めておられ、地域での子ども虐待の活動に大変詳しい人物である。編著者以外の著者は、「千葉子どもの虐待防止研究会」に関係する弁護士、保健師、臨床心理士で、やはり現場で子ども虐待に取り組んでいる方々である。

編著者は、今後、子ども虐待対応のためには連携に裏付けされた「専門性の蓄積」「地域のネットワーク力」ともいうべき新たな実践が必要であるとあとがきに書いているが、この考えが本著を貫いているといえる。

目次をみると「第 1 章 子ども虐待問題の発生要因を考える」「第 2 章 子ども虐待対策の行方―諸外国から何を学ぶか」「第 3 章 子ども虐待基礎知識 Q & A」「第 4 章 子ども虐待を事例から考える」となっている。各章に事例が豊富に取りあげられており、読者の理解を助けるだろう。

もう 1 つの特徴は「第 3 章 子ども虐待基礎知識 Q & A」の項だ。児童相談所編、司法編、保健編、心理・臨床編、里親編から構成され、各専門家が執筆している。Q & A の形式になっているので、読者の関心のあるページから読むことができる。「ほかの保健師はどのように子ども虐待に取り組んでいるのだろうか」「児童相談所での対応はどのようにしているのだろうか」など、日頃感じている疑問に答えてくれるだろう。

子ども虐待を支援するうえで、保健師の不安や悩みも大きいのが、支援する側が燃え尽きないためにも、大いに書籍、文献などを読み、参考にしていきたいものである。お手持ちの書籍にこの一冊をつけ加えることをおすすめする。